

知財人材よ、企画人材になれ

— 妄想×AIで拓く、IPL実践と戦略立案 —

【開催概要】

講師	花崎 健一 氏 (KH ネオケム株式会社 知的財産部長 兼 経営企画部シニアマネジャー・弁理士)
講義時間	70分
対象	知的財産アナリスト認定講座 (特許) 第44期受講者
実施形態	オンライン (Zoom ミーティング)

【ねらい】

IP ランドスケープ (IPL) の普及と AI 活用の進展により、情報収集・分析の敷居は大きく下がりました。しかしその一方で、「分析すること」「AI を使うこと」自体が目的化し、本来の目的である経営・事業への貢献に繋がらないというジレンマが現場に広がっています。

さらに根本的な問題として、先行技術調査・明細書ドラフト支援・権利範囲の解釈補助など、従来の知財業務の中核を担ってきた作業の多くが、AI によって代替される時代がすでに始まっています。知財人材には今こそ、新しい仕事に踏み出す覚悟が求められます。

一方で、知財人材はすでに企画人材になれる素地を持っています。特許出願において「将来の事業構想を見据えて何を守るか」を判断する行為は、まさに企画業務そのものです。技術・ビジネス・無形資産を横断できるという稀有な強みを、経営課題の解決に向ければ、AI との協働で戦略立案まで担える人材に進化できます。

本講座では、講師自身が知的財産部を「企画部門」として再定義し変革してきた実体験を軸に、妄想する力を起点とした企画思考、そして AI を思考パートナーとして活用した戦略立案の実践法をお伝えします。受講者の皆さんが、翌日からの仕事への向き合い方を変えるきっかけとなることを目指します。

【講座内容】

本講座は、「なぜ知財人材が企画人材にならなければならないか」という危機認識から出発します。次いで、知財人材がすでに持っている企画の素地を再発見し、妄想する習慣と AI を組み合わせることで戦略立案まで担える実践的な思考法を体得していただきます。

知財部を「企画部門」として機能させるために講師自身が実践してきた組織変革の実体験 (知財にこだわらないポリシーへの転換、コンセプト検討を起点にした事業課題へのアプローチ、OODA×生成 AI のフレーム活用) をもとに、受講者が自社・自組織に持ち帰り、翌日から実践できる内容を重視します。

特定の AI ツールの操作を教える講座ではありません。「何のために AI を使うのか」「企画業務とは何か」という思考の軸を鍛えることを目的とします。

【プログラム】

Opening

あなたの仕事は、3年後に存在するか？

AI 代替リスクを正面から提示し、「自分は大丈夫」という思い込みを問い直します。先行技術調査・明細書作成支援など既存業務の代替が進む現実を示しながら、本講座のゴールー「企画人材として覚醒するための思考の地図を手に入れる」ーを明確にします。

第1部

知財人材はすでに企画ができる

企画業務への誤解を解きます。企画に必要なのは遠い未来を予測することではなく、近い将来に見えてきていることを捉えて「自分ならこうする」と言える力です。特許出願において将来の事業構想を描く行為はまさに企画そのものであることを示し、知財人材がすでに持つ素地を再発見します。あわせて、講師自身の実体験をもとに、知財部を企画部門として機能させるためのミッション再定義と、「知財にこだわらない」ポリシーへの転換が組織にもたらした変化を紹介します。

第2部

妄想する力 —— 企画の原点

妄想は才能ではなく習慣です。講師自身が経営企画部に着任した際に実践した「一日 1 回、目の前の情報から強引に連想する」習慣を、実際のエピソード（「聖地巡礼→自社の聖地は？」「水が合わない→硬水でもおいしいお茶は？」）とともに紹介します。また、新しいことへのアプローチには難易度の段階があり、いきなり「全くの新規」に挑まなくてよいことを示します。既存製品の改良・用途展開（入りやすい）→異なるステージへの参入→全くの新規、という段階的な取り組み方と、妄想に AI をぶつけることで選択肢が無限に広がる実践を解説します。

第3部

AI と一緒に戦略立案まで担う

IPL や企画業務の勝負は情報収集の前に決まります。「仮説なき調査」が招く失敗の実体験をもとに、初期検討・仮説構築に全力を注ぐ理由を解説します。講師が実践する IPL×OODA ループ×生成 AI のフレームワークと、各ステップ（Observe・Orient・Decide・Act）での具体的な AI への問いかけ例を紹介します。また、AI との協働で仮説を育て戦略立案まで持っていく 5 ステップ（認識合わせ→初期仮説生成→多角的検討→提案具体化→批判的ブラッシュアップ）を解説します。「AI に仕事をさせる」のではなく「AI と一緒に考える」という哲学が核心です。

Closing

今日から何を変えるか

企画人材への進化を小さく始めるための 3 ステップロードマップを提示します。①一日 1 回妄想する（今日から）、②妄想を AI にぶつけ具体化を楽しむ（今週から）、③事業部門の課題を自分の言葉で語れるようになる（今月から）。「知財部は企画部門だ」と自らに言い聞かせることが組織を変える第一歩であることを伝え、受講者一人ひとりへのエールで締めくくります。

【参考文献・参考資料】

- ・ METR. 'Measuring AI Ability to Complete Long-horizon Tasks.' 2025 年 3 月.
<https://metr.org/blog/2025-03-19-measuring-ai-ability-to-complete-long-tasks/>
- ・ 「成果を上げる組織が OODA ループを使う理由」東洋経済オンライン（セールスフォース提供記事）

【講師紹介】

花崎 健一 氏

Kenichi Hanasaki

知的財産部 知的財産部長 兼 経営企画部シニアマネジャー

KH ネオケム株式会社



2007 年	特許事務所に入所。国内・外国・調査業務に従事。
2009 年	株式会社伊藤園に入社。経営企画部にて中期経営計画立案・グループ経営管理（5 年）、知的財産部にて開発戦略と連携した知財強化（2 年）、法務部にてコンサル型法務改革（3 年）に従事。
2022 年	KH ネオケム株式会社に入社。2023 年から知的財産部長（同年より自発的に DX 推進役の部門長として活動）。「無形資産の創造と活用」をミッションに掲げ、知財部を「企画部門」として機能させる組織変革を推進。生成 AI を活用した IPL 実践や全社 DX 推進にも取り組む。2026 年 4 月から経営企画部シニアマネジャーも兼任。

【資格・所属】

弁理士 / AIPE 認定知的財産アナリスト（特許）

伊藤園経営企画部での 6 年間の経験（中期経営計画立案・グループ会社管理・M&A 検討）と、現職での知財部門変革の実践を通じて、「知財部門が企画部門として経営・事業に直接貢献する」ための理論と実践の両方を保有。IPL を「企画業務における分析手法の一つ」と位置づけ直し、生成 AI との協働により知財人材が戦略立案まで担う新しい働き方を自ら実践・発信している。